

ヤマナカ100年の物語①

ヤマナカの創業者・中野富七は、明治30年(1897年)8月15日、愛知郡碧海町相原郷(現在の名古屋市緑区)に生まれました。尋常高等小学校を卒業後、乾物問屋の力ネハイ羽根田商店の奉公人として修業します。

店の掃き掃除、仕入れの手伝い、お得意先まわりをはじめ、どんな仕事でものみこみが早く、周囲を驚かせました。軽なくして仕入れを任され、15歳の頃には番頭格に。朝から晩まで休みなく働くうち、独立開業を夢見るようになります。

大正11年(1922年)2月7日、その夢がついに花開きました。力ネハイの、のれん分け1号店として中区正木町に



食料品店を開店したのです。不況にもかかわらず、6坪半(21.5m²)の店は客でにぎわい、初日は68円50銭の売上がありました。食料品の大店で1日15円も売れれば「繁盛」と言われた時代、富七は夢の第一歩を邁びました。

ヤマナカ100年の物語②

創業者・中野富七は、創業時から「安く仕入れ、人の3倍売る」商法を実践しました。さらに、付加価値のある商品を手がけたことが成長の原動力になりました。

その代表がサケやマスの「みりん漬け」です。自家製造なら仕入コストが半値ですむことに目をつけたのです。店近くの工場で加工に取り組み、商品は飛ぶように売れました。

昭和(1926年～)に入ると戰時色が商売に影を落とすようになりますが、商売への實直さは変わることはありませんでした。邊がお得意様のため、配給品をとっておこうとすると、「外で並んで待っている人のことを思え」と叱りました。戰時下でも不正を行わない態度は地域の人々に認められ、愛知県主催の「ありがとう親切運動」では「親切な店」として表彰を受けました。



富七は終戦後の混亂期も正直一途に商売を続け、ヤミ市と距離を置く姿勢を貫きました。

「昭和恐慌」と呼ばれる不況に見舞われ、失業者が街にあふれました。富七自身やその商界にも少なからず影響がありました。が、富七は効率向上のため、営業用にオート三輪を導入。同業者の多くが大八車やリヤカーを引いていた時代、ヤマナカのオート三輪は評判になり、近所から見物人が来るほどでした。

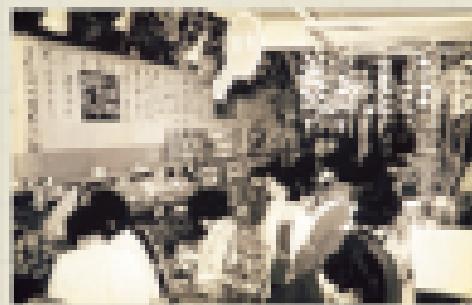
「ヤマナカは2022年で創業100周年」

ヤマナカ100年の物語③

戦後の統制が廃止され、人々の暮らしにゆとりが出てきた頃、店1軒ですべての買物をすませる「ワンストップ・ショッピング」が日本に紹介されました。中野富七(創業者)の長男・富蔵は、総合食品店へ切り替えなければ将来の発展はないと考えました。富七は繊り気ではありませんでしたが、結局は折れ、昭和27年(1952年)7月、ヤマナカ本店が名古屋初の総合食料品店としてオープンしました。新店は従来の乾物、桶缶詰、調味料、果物、野菜に加えて、新たに菓子、パン、鮮魚を扱い、大いに繁盛しました。

同様に、公開經營についても富蔵が主導して取り組み、昭和

32年(1957年)7月、株式会社ヤマナカが誕生しました。近所のお得意が株を引き受けてくれたことに富七・富蔵父子は感激し、さらなる会社の発展を胸に誓ったのでした。



昭和35年中区内のスーパー

次に富蔵が取り組んだのが売場のセルフ・サービス化です。研究熱心な富蔵が、他店よりも早くセルフ・サービスを取り入れようとするのに対し、富七は反対し、双方の意見は平行線をたどりました。このことに限らず、富蔵の「店を良くしたい」という情熱は父子の意見の対立を招いた一方で、店の近代化を推し進める原動力になりました。セルフ・サービスも昭和35年(1960年)12月に実現しました。